紹介

検索機能重視の年史－『経済団体連合会五十年史』を編纂して

村橋勝子^{*1}

[著者抄録] 経済団体連合会は、1999年3月、書籍版とCD-ROM版と2種の『経済団体連合会五十年史』を発行した。両者とも、検索機能に重点を置き、「活用される年史」を目指した。特に、CD-ROM版は、経団連の既刊年史4冊を含む5冊の年史の本文、50年間に発表した意見書、これまでの定款すべての全文、歴代会長やその陣容、年表などを収録、それらを自在に検索できる画期的な年史となっている。しかし、「便利なもの」を作るには、綿密な計画の下、膨大な作業を必要とした。『経済団体連合会五十年史』の内容とその編纂手法を紹介し、反省点・問題点などについても述べる。

[著者付与キーワード] 経団連, CD-ROM, 社史, デジタル化

Introductory article

An important & easily accessible history; The edited "Fifty Year History of the Keidanren"

MURAHASHI Katsuko

[Author Abstract] In March 1999, the Keidanren published both a print edition & a CD-ROM edition of "Fifty Year History of the Keidanren". Both editions are aimed at making searching for information on the Keidanren's last 50 years relatively easy. In particular, the CD-ROM edition contains a wide range of information including the text of past print editions of the Keidanren's history, all of the past articles of association, a history of the past Keidanren chairmen & a chronological record of the Keidanren. This is a fine collection, one in which a large amount of historical information can be searched & accessed very easily. Since this was the first time for the Keidanren to attempt such an undertaking, we would like to share our method of compiling such a large set of information, as well as some of the problems that we encountered with other interested groups.

[Keywords by Author] Keidanren, CD-ROM, company history, digitization

*1 (社)経済団体連合会 社会本部情報メディアグループ (〒100-8188 東京都千代田区大手町1-9-4) Tel. 03(3279)1411 E-mail: murasan@keidanren.or.jp
Japan Federation of Economic Organizations, Social Affairs Bureau, Information Resources Group (9-4, Otemachi 1-chome, Chiyoda-ku, Tokyo, 100-8188)

1. はじめに

1996年8月に創立50周年を迎えた経済団体連合会（略称・経団連）は、1999年3月に書籍版とCD-ROM版と2種の『経済団体連合会五十年史』（以下『経団連五十年史』とする）を発行した。CD-ROM版は、「本格的な年史を自在に検索できるもの」としては、わが国初のものである。

わが国の社史・団体史の発行点数は年間約200点と推測され、明治以降の累積では1万点を優に超す。内容的にも興味深い、優れたものが少なくない。しかし、利用度はまだまだ低く、埋蔵資源化しがちである。その原因の一つは「活用手段が不十分であるため」である。索引のあるものは、筆者の調査によれば、全体の1%に過ぎない。

—コンピュータ時代の今日、年史も電子化すれば、新しい展開が期待でき、活性化・有用化が図れるのではないか。なんと言っても、デジタル情報は蓄積・処理・保存・検索という点で有効性が高い。反復複製しても劣化もない。

—「社史・年史は厚くて重く、読む気がしない」という声も多いが、CD-ROMなら、大容量のデータを収めても、1枚十数グラムの軽さだし、場所もとらない。増刷・改訂も、書籍版より簡単かつ安価にできる。

このような状況を考え、検索性に重点を置いた2種の『経団連五十年史』を編纂した。本稿では、その内容、手法を紹介し、総括してみたい。

2. 『経団連五十年史』の概要

2.1. 計画・企画

『経団連五十年史』は、次のようなスタンス、企画のもとに、1995年10月、編纂に着手した。

- (1) 収録の範囲は最近20年を中心とする。
- (2) 本文は「民間経済政策史」のスタイルを採る。
- (3) 執筆は外部の研究者に委託する。
- (4) 編纂業務は経団連事務局内ですべてを行う。

- (5) 体裁は『経済団体連合会三十年史』（以下『三十年史』とする）に準じる（B5判、本文800p＋資料・年表・索引100p、全900p）。
- (6) CD-ROM版の制作も検討する。
- (7) 刊行は会長の交代時期である1998年5月とする。

2.2. 編纂体制

編纂は、社会本部年史グループが担当し、私が編集者兼編集長を務めた。“グループ”といってもわずか2名、しかも、2名ともに、「情報メディアグループ」（ライブラリー業務）との兼務であった（編纂着手当初は、ライブラリー部門である「広報部情報メディア課」が担当した。前回の『三十年史』編纂を当時の図書館部長が担当したことから、それを継承したのである。その後、1996年6月の経団連事務局機構改革に伴い、「年史グループ」が新設された）。最後の10か月は、年史編纂のためのアルバイト1名が加わった。

本文の原稿は、日本経済史が専門で、『三十年史』の執筆者でもあった武田晴人東京大学経済学部教授に依頼、同教授のもと、3人の研究者が加わった。武田教授には、書籍版『経団連五十年史』の年表と索引の第一次原稿も依頼した。

制作・印刷は、3社の見積・入札の結果、大日本印刷に発注した。制作会社の決定には、①見積金額、②コンピュータ技術、③想定するCD-ROM版のイメージ、の各条件を満たすところとした。

2.3. 構成

『経団連五十年史』全体の構成とコンテンツは、図1の通りである。

3. 書籍版『経団連五十年史』

3.1. 仕様

B5判、全1,351p（内、本文1,089p、資料編38p、年表170p、索引46p）。

図1 『経団連五十年史』のコンテンツ

3.2. 内容

3.2.1. 本文

『三十年史』の要約を「序章」とし、「その後の20年間」(1977年度～1997年度)について書き下ろした。内容は、前回の『三十年史』のスタイルを継承し、経済政策の決定過程への経団連の関与を中心に記述した。既刊年史との継続性・一貫性を考慮したのである。

3.2.2. 資料編

資料編の原稿は、「年史グループ」が作成・執筆した。

(1) 定款

「現行定款」(1991年1月30日変更)の全文を掲載した。

(2) 歴代会長・副会長、評議員会議長・副議長一覧

初代の石川一郎会長から第8代の豊田章一郎会長まで、各会長ごとの陣容(副会長および評議員会議長・副議長の、役職、氏名、就退任年月日、就任時の所属企業・団体、出身母体における役職)を一覧にまとめた。50年間にわたる経団連トップ層が一覧できるのは、これが初めてである。

(3) 常設委員会等の変遷

経団連創立以降50年間(1946年～1997年7月)の委員会変遷が即座に分かる図にした。

(4) 事務局歴代役員

1952年～1997年3月について、見開き2ページの図にして収めた。

(5) 事務局機構の変遷

1952年～1997年6月の変遷と部長名が一覧できるように図解した。

(6) 経団連東富士フォーラム開催一覧

経団連トップ層が、毎年1回、御殿場の経団連ゲストハウスに集まって、その時々テーマについて議論する「東富士フォーラム」のプログラムを、第1回(1986年)から第12回(1997年)まで一覧表にまとめた。

(7) 発行資料一覧

最近20年間の公表・発行資料を、種類別・刊行年月順に記した。ただし、雑誌については、対象期間に関係なく、創刊年、改題年月等を付記した。

(8) 会長・副会長、評議員会議長・副議長一覧

現体制の氏名と、出身母体における役職名を記した。

(9) 委員会一覧

現行の委員会名、委員長名と、委員長の出身母体企業名・役職名を記した。

(10) 事務局組織図

「現行」のものを図示した。

3.2.3. 年表

1977年1月～1997年3月分を収録。見開きで左ページは経団連事項(「経団連の活動」)、「意見・

提言・報告等」), 右ページは外部の主な出来事(「国内政治経済関係」, 「国際経済関係」)を記した。

3.2.4. 検索・アプローチ手段

(1) 目次

本文の記述は章, 節, 項, 目と四つの階層にわたるが, 目次は最小単位の「目」まで出した。11ページにわたる詳細な目次になっている。

(2) 索引

巻末に詳細な索引を付した。3段組で46ページにわたり, 項目数は約6,800語にのぼる。

キーワードの抽出は「人手」による。採録基準を設けた上で, 年史本文の全ページに目を通して抽出, 本文に登場する人名はほぼ全部採録した。人名の肩書として登場する社名・機関名は採録していないが, 完全な同姓同名の渡辺宏氏については, 渡辺宏(東京ガス), 渡辺宏(日立製作所)と, 区別のため, 補記した。

事項はグリーン, 人名はピンク, 機関名はブルー, 意見書名は黄色と, 色で区別して, マーカーで印を付け, そのゲラを制作担当の大日本印刷に渡すと, タグ付けが行われる。それをいったんコンピュータに取り込んで, 漢字コードで配列し, 機械上で, 音順に並べるための「読み」を振ってゲラを経団連に戻す。

年史グループでは, 音順の配列をチェックしつつ, 同義語や関連語, 下部機構から上位, 略語とフルネームなどについて, 参照を付していった。例えば, 委員会の下の「部会」は, 委員会の下にまとめ, かつ, 部会名からは「委員会名」への参照を付した。

4. 『CD-ROM版 経済団体連合会50年史』

4.1. マルチメディア版か, テキスト版か

CD-ROM版の検討に際しては, CD-ROM版社史を発行または企画している会員企業等と呼びかけて「年史の電子化研究会」を数回開催し, ヒアリングと具体的検討を行った。

CD-ROM版の年史としては, 「マルチメディア版」と「テキスト版」と, 二つのタイプが考えられる。

マルチメディア版は, 例えば, 過去のテレビコマーシャルや経営者の肉声など, 動画, 音声, 画像, 文字が入り交じり, ビジュアル中心の「鑑賞し, 楽しむ年史」の色合いが濃い。年史にPR機能を持たせる場合に適している。

一方, テキスト版は, 大量の文字情報を収め, それを詳細にあるいは多面的に検索する「百科事典的な年史」と言える。

既刊のCD-ROM社史はすべてマルチメディア版であった。しかし, 経団連では, テキスト(文字)中心のもの, 経団連の50年の歴史が分かる「本格社史のデジタル化」を選択した。その理由は以下の通りである。

(1) 利用目的

経団連(なかでも, 年史を最も利用するであろう経団連事務局員)の利用傾向を想像すると, 資料的価値の高い年史が有効と思われた。そのような年史は, 文書情報を大量に収録し, CD-ROMの特性を最大に生かし, 検索性や柔軟性を優先させたいと考えた。

マルチメディア版とテキスト版では, プログラミング(オーサリング)の方法・ソフトウェアが異なる。マルチメディア版は, 華やかな印象を与える反面, 検索機能は貧弱である。

また, マルチメディア版社史は, 静止画をクリックして動画になると, 「あ, 動いた!」と, すぐにほかの画面へ移るなど, 利用者が情報の中身でなく, パフォーマンスにばかり関心を持ち, 一度見てしまうと, 後はあまり利用しないとも聞いたからである。

(2) 資料・データの保存

経団連独自の資料・データは, 自ら収集・整理・組織化して, 利用しやすい形で保存しておかねばならない。50年間の史料を1枚のCD-ROMに収録すれば, 情報の散逸を防ぐだけでなく, 使い勝手も格段に良くなる。しかも, 年史本文とリンクさせれば, 年史にも厚みが出る。

(3) 容量の問題

マルチメディア版にすれば、容量が大きくなり、必要十分なデータを収録しきれない恐れがある。

(4) 素材（音声・画像データ）がない。

マルチメディア版CD-ROMを制作するには、それに適したデータ・素材が必要であるが、経団連内部には、適するデータがなかった。

経団連は、ニュースなど放送に度々登場するが、そのビデオやカセットテープは所蔵や保存をしていない。50年も前の映像や音声はたやすく入手できない。新たに作ったり借りるにしても、費用も手間もかかる。

(5) センス（演出技術）がない

マルチメディア版CD-ROMの制作には、動画の見せ方など、映画製作者のようなセンスや手腕が必要である。

4.2. 仕様

ハイブリッド版CD-ROMとした。経団連事務局ではWindowsを利用しているが、経団連会員も

その他も、コンピュータのメーカー、ユーザともに、多岐にわたる。Windows, Macintoshのどちらかにするわけにはいかない。CD-ROMの重さは、わずか17gである。

4.3. 内容とメニュー

『CD-ROM版 経済団体連合会50年史』は、書籍版を単にCD-ROMに収めたものではない。内容もアプローチの仕方も全く異なる。

収録した文書は、今回書き下ろした『経団連五十年史』を含む経団連の5冊の本格年史の本文全文（合計4,700ページ）、創立以来50年間に発表した意見書（約1万ページ）、原始定款から現行定款まで24の定款の全文、50年間の年表、歴代会長等一覧、経団連の概要などで、両面印刷物の重さにして20キロ分以上の内容となり、かつ、検索もできるようにした。

メインメニュー（構成）は、図2の通りである。以下にこの内容を詳説する。

図2 CD-ROM版の初期画面

4.3.1. 経団連の概要

経団連の活動概要や組織を紹介するもの。テキスト表示エリアに内容を表示、スクロールして最後まで見ることができる。

4.3.2. 歴代会長

初代から第8代までの各会長の略歴と、その時代の副会長、評議員会議長・副議長を掲載している。

歴代会長の一覧画面（顔写真と氏名）に表示されているそれぞれの写真をクリックすると、各会長の詳細画面（画面左側に写真、氏名、在任期間、右側に会長略歴、副会長、評議員会議長・副議長の氏名、出身企業名と役職、在任期間）が表示される（図3）。

「歴代会長」のコンテンツに登場する人物は延べ192人。出身企業や就任年月も即座に分かる。2代以上の会長にわたって務めた副会長等は、在任期間全体が分かるように表示した。

図3 「歴代会長」の詳細画面

4.3.3. 定款全文

原始定款から現行定款まで、すべての定款の全文を見ることができる。1946年創立時の原始定款以降、任意法人の時代のものが11、社団法人化（1961年）以降が13と、変更を重ねて合計24の定款がある。

画面上部のリストで定款を選択すると、その定款全文が表示される。どの定款を見ているかは、

上部リストに帯がかかっているの、すぐに分かる。

4.3.4. 総会決議・意見書

経団連が50年間に発表した1,215件の意見書・総会決議等を年度別のリストから見ることができる。

画面左上の年切替ボックスの矢印をクリックして年度を切り替えると、各年の意見書・総会決議が発表日順にリスト表示される（図4）。タイトルを選択して詳細画面に切り替えると、該当の文書が画像またはテキストで表示される。文書が2ページ以上にわたる場合は、画面下の矢印ボタンを操作する。

図4 意見書リスト（年別）

4.3.5. 年史本文

既刊の本格年史4冊（『経済団体連合会前史』1962年5月刊、B5判・785+71p、『経済団体連合会十年史 上』1962年9月刊、B5判・662+193p、『経済団体連合会十年史 下』1963年4月刊、B5判・923p、『経済団体連合会三十年史』1978年5月刊、B5判・993p）と『経団連五十年史』、合計5冊の年史の本文を見ることができる。冊子体と同様、目次の階層をたどるメニュー検索である。

画面左側に並んでいる年史の種類を選択すると、右側にその年史の最も粗い目次が表示される。章→節→項→目と階層をたどって（図5）読みたい見出し（「目」）にたどり着いたら、「年史本文表

示」ボタンをクリックし、該当本文を表示させる。次の項目へ移動したい時は、画面下の矢印ボタンで操作する。

図5 年史本文の目次展開

4.3.6. 年表

1947年から1977年まで、年ごとに、「経団連関連事項」と「政治・経済界動向」を見ることが出来る(図6)。

画面左上の年切替ボックスの矢印をクリックして年を切り替える。

図6 年表の画面

4.3.7. 本文検索

年史本文をキーワードで検索し、表示させる。

まず、検索対象の年史を指定し(年史は1~5冊の範囲で自在に指定できる)、「50音・アルファベットの選択」エリアにカーソルを持っていくと、「50音・アルファベット・数字の表」が表示される。目的のキーワードの最初の音(または字)の部分をクリックすると、その音で始まるキーワードが50音順に表示される。カーソルを移動して、キーワードを選択し、「検索実行」ボタンをクリックすると、ヒット件数と該当項目のリストが表示される。見たい箇所を選択し、本文を表示させる(図7)。

1件分の本文データは、目次における最小見出し単位「目(もく)」とした。先頭部分からたどっていくと、検索したキーワードは黄色に着色表示されている。

検索のためのキーワードは約3万件にのぼる。

4.3.8. 意見書検索

経団連創立以来50年間に発表した意見書・総会決議等を、キーワード、委員会、年(または年代)で検索し、全文を表示させる。

キーワードと委員会は、一つ以上のキーワード(委員会)を含む「or検索」と、すべてのキーワード(委員会)を含む「and検索」を設定できる。

「キーワード」は上記「本文検索」と同様に、「委員会名」は表示される音順リストをドラッグして選択し、「年月」は矢印で設定する。

条件が揃ったところで「検索実行」ボタンをクリックすると、ヒット件数と意見書・総会決議のタイトル一覧が表示される(図8)。タイトルを選択して、クリックまたは表示ボタンを押すと、意見書・総会決議の詳細画面(全文)が画像またはテキストで表示される。

さらに、各意見書は、関連する年史本文にリンクしている。

図7 本文検索画面

図8 意見書検索画面

4.5.2. データの選択・変換・入力

(1) CD-ROM版に用いたデータ

CD-ROM版の素材は、図10の通りである。データの種類としては、①既存のテキストデータ、②既存の電子データの変換、③印刷物をテキストデータ化、④CD-ROM用に新たに作成、と4種類ある。

(2) 年史本文

今回書き下ろした『経団連五十年史』については、書籍版用のテキストデータ1,090ページ分をそのまま利用した。執筆陣が原稿執筆段階からコンピュータを使用したからである。

既刊年史4冊は、スキヤナで読み込み、デジタルに変換した。紙メディアに蓄積された膨大な情報をテキストデータに変換する作業は、大変な努力と忍耐を要した。

一般に、スキヤナでの読み込みはコピーと同じように思われているが、全く違うものである。スキヤナの読み間違いは「午」を「年」とするなど、似た字に生じるので、校正には集中力を要する。特に「前史」「10年史 上・下」の3冊は、旧字が多かったことに加え、縦書きであったために、作業は過酷であった。数字の「三」(3)を「一一」(111)、「二」(21)、「一二」(12)と読みだりするのである。

読み込むページが歪まないよう既刊年史をバラし、活字がきれいに読めて汚れない「印刷物」をスキヤンしても、ほとんど毎行、修正がある。

画面上の校正を終え、印字して原本と比べてみると、また1ページで5か所くらい直しがある—こんな作業を延々と続けるのである。

たとえ、スキヤナの性能が格段に良くて95%読めたとしても、5%の間違いを探して直すためには、全部に目を通さなくてはならない。機械に強いスタッフでも、1冊のスキヤニングに1か月半を要し、結局、既刊年史4冊のうち3冊については、外部（アルバイト）に依頼した。

スキヤニングに使用したハードウェアはHEW-LETT PACKARDのHP DeskScan II、ソフトウェアはWinReader PROである。

(3) 意見書

経団連創立以降48年分の意見書・提言は、光ファイル化（画像データ）していたので、それを転用した。

光ファイルからパソコンへのデータ取り込みに際しては、当初技術的な問題に直面した。ノウハウをメーカーが公開しなかったためである。結果的には、マイクロフィルムの会社がTiffファイルへ変換してくれた。変換には2週間を要した。

図10 CD-ROM版の素材

1994年6月から97年3月の間に発表した意見書は、インターネットのホームページからダウンロードした。経団連は95年1月にホームページを開設したが、豊田会長就任以降の意見書は、ホームページで公開していたのである。

データ未入力の見解書本文は、新たにデータを作成した。単純な文章のみは経団連でテキストデータに、表やグラフを含むものは大日本印刷でスキニングしてイメージデータにした。

(4) 年表

1947年からの30年間については『三十年史』の年表をスキナで読み込んだ。最近20年間については、書籍版用のデータを使用した。創立からの30年間の項目数とバランスをとるため、データを大幅に削除した。

(5) その他

「経団連の概要」は、インターネットから取り込んだものの内容等を改訂して使用した。「歴代会長」のページの各会長の略歴はテキスト、副会長等のリストはExcelで新規作成した。「定款全文」は印刷物を見て新たにテキストデータを作成した。

新規作成データは、量が少なかったこともあり、精神的・肉体的にさほど苦しいものではなかった。

4.5.3. キーワードの抽出と整理

(1) 本文検索のためのキーワード抽出と整理

『経団連五十年史』については、書籍版の巻末の「索引」をそのまま使用した。

既刊年史4冊については、『経団連五十年史』索引のキーワード抽出と同じ方法で抽出した。本文に登場する人物も、ほぼ全員拾い出した。『三十年史』には索引があつたが、『経団連五十年史』に比べ、粗いものだったので、他の既刊年史同様に採録・抽出を行った。マーカー付与作業は、既刊年史1冊につき20～30時間を要した。

キーワードの整理や仮名振りに際して、昔の人名の正確な読みや外国人のフルネームを調べるのは、実に骨が折れた。例えば、アメリカの政治家ダレスのフルネームの特定には注意が必要である。ダレスは兄弟二人とも政治家で、兄のジョン・フォスター・ダレスは外交官、弟のアレン・ウェ

ルシュ・ダレスは弁護士でCIA長官を務めている。経団連の年史に、「ダレス特使」とか「ダレス国務長官」と登場するのは、兄の方である。こういったことを、人名事典や関係方面に問い合わせ、一つずつ確定しなければならない。

本文検索のキーワードをフリーキーワードにできなかったのは、人名が多いことと、同義語処理を行ったためである。

人名はやっかいなものである。正確に入力しなければヒットしない。例えば、姓の斎藤の「斎」は、「齊」「齋」、名の「××お」は「夫」「男」「雄」「生」「郎」などと様々である。正確な字・言葉で検索しなければ、十分な検索結果が得られないから、キーワードを確定したのである。

同義語処理は、例えば「インサイダー取引規制」で検索すれば「内部者取引規制」も、「WTO」では「世界貿易機関」も、「ユニタリー・タックス」では「ワールドワイド・ユニタリー・タックス」や「WWUT」もヒットさせるためである。「200海里」と「200カイリ」など、同じ事象でも、時と場合あるいは人によって、言葉が変わったり、表記が違ったりするために、フリーキーワード（全文検索）だとあまりヒットしないのである。

同義語処理は人物についても行った。年史に登場する人物は、同一人物でも、肩書が変わったり、「姓+肩書」で表示されている場合が多い。例えば、経団連第3代会長を務めた「植村甲午郎」は、事務局長、顧問、委員長、副会長、会長と、様々な肩書きで登場するが、本文中でどのように表示されていても「植村甲午郎」で検索すればヒットするように名寄せのデータ処理をした。

同義語処理を行うことによって、キーワードの総数も抑えられる。それでも、本文検索用のキーワード数は約3万語と、分厚い経済事典の項目数より多くなった。

(2) 意見書・総会決議検索のためのキーワード

光ファイルから変換したものについては、検索用データもそのまま転用した。画像ファイル名、意見書タイトル、キーワード、委員会名、発表年

月などのインデックスデータを大日本印刷で取り出したが、文字の崩れ等が若干あった。また、光ファイルにおけるキーワードは、仮名だったので、名寄せして音順に並べ、Excel形式に整理した後、漢字変換した。

インターネットで公開している意見書、ならびにそれ以前の意見書で光ファイルから漏れていたものについては、新たにこれらのデータを作成・付与した。意見書検索用のキーワード件数は約500件である。

4.6. 年史本文と意見書にリンクを張るために

年史本文と意見書にリンクを張るために、まず、意見書に発表年月日順に一連番号を付した「意見書リスト」を作成した。番号は、光ファイル分とインターネット分は別建てにし、追加スキャン分は枝番にした。リストは、意見書名だけでは特定しにくいので、一連番号に続き、発表年月日、タイトル、キーワードの情報を付し、万全を期した。

次に、5冊の年史本文全部のハードコピーに目を通して、意見書タイトルが現れる都度、意見書リストと照合して、ゲラの欄外に意見書番号を記入していった。

4.7. 検証

「検証」は書籍版の「校正」に相当する作業である。CD-ROM版の仕上げ直前に行う。経団連サイドでは3回、制作を担当した大日本印刷サイドでは、プログラム検証を含め5～6回の検証を行った。経団連事務局ではWindows版しかテストできないので、Mac版については、制作担当の大日本印刷のほか、外部の協力者にもお願いした。

検証は、サンプル調査ではなく、あらゆる画面を出してみる「ローラー作戦」で臨む必要がある。仕様通りに動作するか、キーワード検索の結果に異常はないか、本文と意見書はうまくリンクするか、画面上の表示や画像のクオリティに問題はないか、文字化けは発生していないか、キーワードの配列の乱れはないか、実際に各画面を呼び出し

て確認・テストし、ミスやバグ、使いにくいところを制作担当(大日本印刷)に申し入れる。

検証も人手に頼る作業だが、今回は、書籍版の編纂スケジュールが当初の予定からかなり遅れ、それがCD-ROM版の制作に大きく影響した。部分的には経団連事務局のスタッフや外部の協力者など数人で検証したが、実質的には1人で1バージョンをわずか一晩でやるハメになり、ハードな作業であった。当初の予定では、1バージョンに数人で1週間かけることになっていたのである。

4.8. 情報量

CD-ROMの最大容量は640MB。『CD-ROM版 経済団体連合会50年史』では、その65.6% (約420MB) 使用している。各コンテンツのデータ量と内訳は下記の通りである。

経団連の概要：120KB (0.03%)

歴代会長：760KB (0.2%)

定款全文：1.5MB (0.008%)

意見書：350MB (83.1%)

年史本文：10MB (2.4%)

年表：370KB (0.09%)

その他プログラムファイル：60MB (14.2%)

容量の大部分を占めるのは、意見書(全文)の画像ファイルである(ただし、画像ファイルは、テキストデータと違って、見た目の大きさ(縦・横の長さ)の2乗で増減するので、縦・横の長さが変わるとファイルサイズが激増・激減することになる)。

5. 工夫と特色

5.1. 書籍版

(1) 詳細な索引

『三十年史』の索引(2段組19ページ、項目数は人名202、事項1,250)は本文885ページに対し項目数1,452語であったが、『経団連五十年史』の索引は本文1,089ページに対し項目数6,800語と、3.8倍の密度になった。参照もきめ細かくし、詳細・確実な参照を可能にした。

(2) 詳細な年表

CD-ROM版に比べ、「最近20年間」については、書籍版の年表が数倍詳しい。年史本文には登場しない細かい行事や史実も、できる限り調べて掲載した。年表の第一次原稿は、経団連の資料（『経団連週報』や『事業報告』など）や新聞記事から武田教授が採録し執筆したものであるが、さらに年史グループで付加した。

(3) 年表から本文への参照

本文において、意見書等について言及した場合は、年表の「意見・提言・報告書等」欄の項目末尾に[]内に、本文の該当ページを記し、参照できるようにした。CD-ROMの本文・意見書のリンク同様の機能を果たすが、CD-ROM版同様、手間暇がかかった上、本文のページが確定してからでないと作業が行えず、かなりきつかった。

(4) 図解

資料編の「常設委員会等の変遷」や「事務局機構の変遷」は、視覚的に理解できるよう、図解した。歴代の会長・副会長等の一覧も、陣容の“規模”が一目で分かるような表にまとめた。

5.2. CD-ROM版

ユーザにやさしいインタフェースを工夫した。

(1) 効率

文字中心であっても、中身に興味を持ってもらうためには、画面デザインや切り替えの速度が大事である。初期画面をスッキリさせ、クリックボタンの位置や名称にも配慮した。

無駄な待ち時間を設けないように、各コンテンツへの切り替えは、初期画面だけでなく、どの画面にも下部にメニュー切替用のボタン類を配し、他のコンテンツへ直接飛べるようにした。これは、書籍版にあてはめて言えば、常に目次が手元にあるようなものである。

(2) 階層

過剰にリンクを張ったり、極度に凝った複雑なインタフェースは、ユーザの混乱を招き、現在どこのコンテンツにいるのかが分かりづらくなる。階層はなるべく深くならないようにした。

(3) キーワードファイル

検索画面に表示されるキーワードと、実際に本文にある単語が必ずしも同一ではなく、「意味」で調べるキーワード検索となっている。内部的には、実際の単語と意味を表す単語が対になった辞書を装備しているといったイメージである。

(4) 本文の検索結果の表示

本文の検索結果をいかに表示するかは結構難しく、試行錯誤を重ねた。結果的には、どの年史の、何章・何節のどのような見出しのところか、また、その年代はいつ頃かを、1件1行で示した。

(5) 意見書本文の表示

意見書本文の画面は、何という意見書を見ているかが分からなくならないよう、画面上部に、タイトル、発表年月日を常に表示するようにした。

(6) 年表の一般事項と経団連事項の関係

年表は経団連事項だけでなく、国内・海外の事項を併記し、時代背景が分かるようにした。

自然災害は、例えば伊勢湾台風や新潟地震は拾っていないが、阪神・淡路大震災はもちろん、北海道南西沖地震や雲仙・普賢岳噴火は載せてある。経団連が災害復興に組織的に対応するようになった自然災害だからである。

(7) 年表の形式とデータ調整

基本的にはテキストだが、この部分は特殊な作り方をしている。Excelのような表示方法をとっているが、これはプログラム上、2段組のテキストを表示させることが困難だったためである。

年表画面は、左半分が経団連事項、右半分が政治・経済界動向と2段組にしたが、画面の大きさによる制限があるため、左右がほぼ同じ時期（月）の出来事になるように情報量を整理した。

事項は、各欄内での追い込み式にすれば、収録できるデータ量は増えるが、見た目に煩雑になるので、右段と左段と、月日の行を揃えた。このため、“空き”が多くなった。

(8) 外字フォント

外字は、書籍版では写植にするなど、完全に対応できたが、CD-ROM版では、旧字や単位記号等は常用漢字に置き換えた。中国語の人名などは、

仮名で表記したものを【 】内に記し、モニターでは表示できない旨を明示した。

6. 書籍版とCD-ROM版の比較

(1) 書籍版の特徴

- 一覧性があり、前後関係が分かりやすい。
- すぐに中が見られる。
- 索引で引いても、ページの中のどこに出てくるのか見つけにくい。
- 重くて場所をとる。

(2) CD-ROM版の特徴

- 50年分通して検索できる。
- 1枚に大容量のデータが入り、場所をとらない。
- 検索結果の件数が多い場合、どの章のどこに出ているか分かるので、あたりがつけやすい。また、本文にジャンプした時、検索したキーワードがカラー表示されているので、分かりやすい。
- 画面上で長文は読みにくい。
- 表示エリアが小さく、瞬間的に目に入る情報量は少ない。
- 意見書本文の印刷ができない（他のソフトを利用すれば可能）。

書籍版とCD-ROM版のどちらが使いやすいかは、人によるかもしれないが、どちらも利点・難点があることは確かである。新たなメディアは、“取って代わるもの”ではなく、新規ニーズや機能を呼び覚まし、補完関係にあるものと捉えられよう。

7. まとめ

7.1. 編纂に要した期間

創立50周年を1年後に控えた1995年8月末に、「年史を作る」方向で検討を開始、9月に概要、スケジュール、予算等を確定、95年10月に編纂に着手した。2年半で完成の予定だったが、結局3年半を要した（CD-ROM版に要した時間は実質1年位。ただし、作業密度のバラ付きは当然ある）。

遅れの原因は、書籍版の校閲・リライトに多大

の時間を要したことと、CD-ROM版が、当初想定していたものより数倍内容の濃いものになったためである。

7.2. 制作部数

完成間近まで書籍版、CD-ROM版ともに3,000部（セット）を予定していたが、結果的には2,500部制作した。500部減の理由は、書籍版のページ数が35%も増えたために、印刷・制作費が膨らんだこと、厚くなりすぎて、保管スペースの確保が難しくなったことである。

7.3. 費用の内訳

総費用を100とした時の諸費用の内訳は次の通りである。

原稿料：38.2%

印刷・制作費：54.5%

CD-ROM用データ処理・変換費用：1.5%

編集・校閲費用：1.0%

会合費：0.8%

運送費：3.9%

7.4. 年史の配付先

発行直後の配布の内訳は次の通りである。

経団連会員（主に代表者）：1,370

図書館・大学・官公庁：150

マスコミ（記者クラブを含む）：75

政治家：15

研究者（執筆陣を含む）：60

類縁機関、経済団体等：60

事務局職員 & OB：160

海外：20

その他：120

残部：470

8. 反省と展望

8.1. 反響

新聞記者にはおおむね好評で、完成直後、自分のパソコンにCD-ROM版をインストールして、

経団連関係記事を書く際に利用している記者もいる。大学教授や学生からの入手希望も多い。

経団連事務局においても、関係団体の歴史を執筆する際に利用したり、経団連の会合の資料づくりの際に参照したりしている。ライブラリーのレファレンスにも利用している。既刊年史と比較すれば、『経団連五十年史』の利用頻度はかなり高い。経団連の年史は、「読み物風」ではなく、「調べる」ことに適していたと言える。

CD-ROM版については、これから社史を作ろうという企業からの問い合わせも多い。

8.2. 良かった点

(1) コンセプトがはっきりしていた

これは、年史の編纂者、利用者、資料の保存・システム化の担当者が重なっていたことによると思う。作るもののイメージが明確であったから、迷いもなかった。

年史編纂のような時間と忍耐を要する作業にあたって大切なことは、最初に「仕上がり」を正確にイメージして、それを実現する方法を具体的に考え、準備・実行することである。作業は膨大だから、重複や無駄を極力避けなければならない。例えば、キーワードの選定・抽出では、該当する部分にだけ正確にマーカーを引かなくてはならない。前後の文字や「、」や「。」までかかると、その部分も取り込まれてしまい、後で訂正作業が生じるからだ。

(2) 意思決定がスムーズで、混乱がなかった

これは、意思決定の導線を短くし、編纂にかかわる一切の「窓口」を一本化した効果である。

編纂委員会は設けず、「必要な時は、部長会議を一時編纂委員会に置き換えて議論する」ことにしたが、結局1度もやらなかった。常務会に年史の案件を諮ったのも、1~2回である。

(3) 豊富なデータ量

CD-ROM版に、新たに編纂した『経団連五十年史』だけでなく、既刊の本格年史すべての本文も収録したのは、大変ではあったが、良かった。

経団連の年史は、経団連の会員や事務局だけで

なく、一般の人々にも、経済・産業政策等の様々な事柄について、経緯・推移を調べる資料として利用されることが多い。「機関の歴史」であると同時に、「民間の側から見た経済政策史」の性格を持つからである。

また、「前史」は、日本のみならず、海外先進国を含めた、貴重な「団体論」ともなっているのも、私としては、ぜひ、これをCD-ROM版に収録したかったのである。

意見書も50年分収録し、年史に厚みが出せた。

創設時から現行までの経団連の24の定款全文を集めたのも、『CD-ROM版 経済団体連合会50年史』が初めてである。定款は、一見無味乾燥に思えるが、組織の目的や業務に関する基本的な規則を記したものだから、これを読み比べてみると、組織の方針の変遷が分かって実に興味深い。

(4) 環境

経団連事務局で、最近の文書や名簿をデジタル化していたこと、執筆者、編纂事務局、制作会社がどこもコンピュータを利用できたことなど、環境が整備されていた。

(5) 人を得た

年史グループに、コンピュータに強いスタッフがいたこと、経団連の活動や関係者に詳しく、かつ博識なアルバイト（経団連事務局OB）を得たことは幸運であった。

CD-ROM版の制作に関しても、大日本印刷の制作担当者がライブラリーサイエンスとコンピュータ技術を兼備し、かつ、作ろうとしているCD-ROMのイメージを明確に理解していた。

8.3. 反省と今後の課題

(1) スケジュールとマンパワー

マンパワーが少なかった。専門家に言わせると、5~6人で5年近くかかる仕事量だったという。

1,351ページの書籍版と初のCD-ROM版を同時発行したのも無理があった。CD-ROM版に必要なデータ・情報（例えば、本文検索に必要なキーワード、目次の見出し語、意見書名）の抽出作業は、書籍版のデータが完全に揃ってからでないと

取り掛かれない。このため、CD-ROM版は書籍版発行後2か月程度後にするのが一般的だという。

(2) 予算

『経団連五十年史』編纂・制作のための予算は、当初、原稿料と印刷・制作費しか計上していなかった。CD-ROM用のデータ入力や変換にかかるコスト、会合費、発送・梱包材の費用などは予算化していなかったのである。

また、CD-ROM版は、『経団連五十年史』の本文と、その検索程度の、簡単なものを想定しており、かなり低価格で見積もってあった。

実は、私が編纂業務を申し付かったのは、編纂が開始された2〜3か月後のことである。その時にはもう、予算その他、決まっていた。このため、少ないスタッフ数にもかかわらず、CD-ROM用データの入力・変換を含め、作業のアウトソーシングが難しく、ほとんどを内部化したために、1人の作業量は膨大になった。年史編纂予算は特別枠のため、一般会計から大幅に追加することは難しかったからである（結果的には、“数パーセント増”を認めてもらった。増加分は、既刊年史のスキニング費用や会合費などであった。スキニングはアルバイトに1冊25万円程度払ったが、これは、かなり安くできた方である）。

必要な業務を具体的に予想し、予算の立て方を十分に考慮しなければならなかったはずである。

(3) 索引・キーワード

書籍版の索引は、人名・機関名・事項を混配した。『三十年史』では人名と事項を分けていたのだが、『経団連五十年史』では人名を網羅的に採録したことから、頻度に極端な差が目立つのを危惧したからである。しかし結果的に、これは杞憂だった。機関名、事項との混配は、配列に苦勞した。

CD-ROM版のキーワードは、時間の制約もあって、整理が十分にできていない。

配列は、書籍版では数字やアルファベットを先に出し、その後、音順・字順の電話帳方式としたが、CD-ROM版では完全な50音順とした。このため、両方を使う場合、混乱が生じる。

(4) 書籍版の重量化

あまりに厚すぎ、重すぎた。製本の限界に近い厚さ7cm、重さ3.53kgもあり、片手では持てない。

当初予定より、本文原稿が290ページ増（1.36倍）、資料・年表・索引が160ページ増（2.59倍）となってしまった。ページ数は1,000ページ以内に抑えるのが望ましい。

(5) 書籍版に写真・図版がほとんどなく、堅い

(6) CD-ROM版に、書籍版にある写真、図、グラフなどを取り込めなかったこと

(7) CD-ROM版の意見書画像データの視認性と、印刷ができない（あるいは困難な）こと

意見書のほとんどが画像データで見にくく、プリントもできない（ただし、別ソフトを使えば可能。また、「昔の意見書の古色蒼然とした画像が、時代を感じられていい」と言う人もいる）。これには下記のような様々な要因がある。

- ・もともとの光ファイルの画像が粗い。
- ・拡大すればそれなりに見られるが、CD-ROMの容量面から、画像を大きく表示できない。
- ・大きく見せるとスクロールの必要があり、互いにトレードオフの関係にある。
- ・意見書原文に縦書きのものが多く。
- ・印刷可能にするためには、他のブラウザを立ち上げることになり、画面の切り替えが煩雑になる。
- ・独自に印刷機能を付けるには、プログラム開発が必要。また、検証にもかなりの時間・労力・費用がかかる。

意見書全文をテキストデータにすれば良かったのだが、人手も時間もなかった。しかし、いずれはテキスト化しなくてはならないと考えている。

(8) ハイブリッドはやりにくかった

WindowsとMacは、基本的にプログラムは両方とも独立しており、特にMacについては、C言語による開発がメインとなるために、時間的にも費用的にも、Windowsに比べて多くかかる。また、それぞれのOSが持っている表示機能が異なるため、完全に同じ仕様というのが困難である。

8.4. 年史編纂業務の省力化とデジタル化

「年史のデジタル化」もさることながら、強く実感したのは、「年史編纂におけるコンピュータ活用」の効果である。

原稿執筆はもちろん、連絡や問い合わせには電子メール、日誌、校閲・進行状況の把握・記録はExcelを活用した。関係文書は、共用ファイルのフォルダに格納して保管・整理し、いつでも即座に取り出せた。総目次はExcelデータにしたので、階層が分かりやすかった。書籍版資料編の「委員会の変遷」の図など、Excelデータとして処理しなければ、大きな混乱を起こしたであろう。完成後の発送名簿も、約1,300件の経団連会員宛は既存の名簿を活用、その他の追加・新規分も既定のExcelフォーマットで作成し、それをもとに、大日本印刷で宅配伝票に直接打ち出すようにした。編纂の様々な作業において、フルにコンピュータを活用した。

コンピュータは年史の編集・制作の環境を大きく変え、合理化してくれる。編纂作業をデジタル化するためには、執筆者、編纂事務局、制作・印刷会社の三者がコンピュータを活用できなければならない。当会の『経団連五十年史』の場合、この条件を満たしていたことは大きなメリットであった。しかし、一般的には、まだ、環境・条件が整備されているとはいえない。特に、原稿執筆段階が難しいようである。

多大の時間的・労働的ロスを避けるためにも、編纂作業にコンピュータを最大限に活用することを勧めたい。

9. おわりに

『CD-ROM版 経済団体連合会50年史』は、前例もなく、手探りの挑戦だったが、コンテンツ、画面のデザイン、切り替え速度など、ほぼ予定した通りに出来上がった。

対外向けのPR色や広報色が強ければ、マルチメディア版にして事業内容や沿革などを華やかな演出でアピールすることも考えられる。しかし、CD-ROMの特性を考えると、年史にはテキスト系が向いているのではなかろうか。マルチメディアタイプは、例えばビデオなどと比較した場合、是が非でもCD-ROMでなければならないわけではないような気がする。CD-ROMが媒体として目新しい間は、アピール性もあり、PR効果もあるかもしれない。しかし、ブームが去り、他のメディアが進出すれば、そのアピール性もなくなるだろう。

コンピュータ技術は急速に進歩・変化し、ソフト、ハードもどんどん変わる。今回の『CD-ROM版 経済団体連合会50年史』も、いつまで使用可能か、定かでない。しかし、データをデジタル化しておけば、次の新しい媒体への変換にも備えられる。歴史的な資料・情報の電子化は、年史の活性化・有用化だけでなく、膨大な資料を軽やかに活かし続けることにもつながるはずである。

*本稿の執筆に際しては、CD-ROM版の制作を担当された大日本印刷（株）年史センターの鎌田泰二氏に、ご協力とアドバイスをいただいた。

～～～ 参 考 文 献 ～～～

- 1) 村橋勝子. コンピュータ時代の「社史」づくり—CD-ROM版『経団連50年史』を作成して. 出版ニュース. Vol.1836, 1999, p.6-10
- 2) 村橋勝子. 社史をめぐるアレコレ その15 索引と目次について. 情報管理. Vol.38, No.3, 1995, p.246-259
- 3) 長谷川秀記. 講座 新時代における情報提供術 第1回 電子出版の編集工程とデータ加工. 情報管理. Vol.41, No.1, 1998, p.32-47